

《教育長メッセージ 第35号》

『田んぼ』

先生が
ずっと待ってる
田んぼ水
一枚待ってる
水ガラスをね



これは、うろ覚えですが、有馬小学校に赴任した年の6年生の男の子が、国語の時間に作った短歌です。(大事に保管してあったので、自宅の屋根裏部屋にしまった当時の資料を開けば、正しい文言がわかるのですが。)

私は、23歳で教員になり、杉久保小学校に赴任しました。9年7カ月過ぎして、異動することになり、当時の校長先生に「富士山がよく見える学校」という希望を出して、有馬小学校に異動することができました。

夕暮れ、子どもたちが帰って、4階のベランダで黒板消しをたたいて、富士山と大山とそこに広がる有馬の「田んぼ」を眺めていました。今は、だいぶハウスが立ち並びましたが、その頃は、中河内から門沢橋や中野までずっと「田んぼ」が続きました。「田んぼ」の向こうに大山があって、富士山がそびえるという感じでした。

そして、よく子どもたちに話していました。「田植えの時期になり、田んぼに水が入るとガラスのように光を反射して輝くはずだ。それを楽しみにしているんだ。」と。

男の子は、そのことを短歌に表してくれたのです。うれしかったです。

ところが、海老名の田植えの時期は遅く、田舎では4月中に田植えが終わるのですが、5月の連休が終わっても始まりませんでした。

東北の農家で生まれた母は、初めて神奈川に来た春に「こごいらは、いずんなったら、田植えすんのがな、だいじょぶなんだべが、こごいらはあったげがら、いねも、すぐそだずんだべな。」と心配したほどです。

5月末になって、「田んぼ」に水が入りました。鏡のように光を反射することはありませんでしたが、水ガラスが何枚も広がりました。

市役所5階から南側を見ると、中新田や大谷の「田んぼ」が広がります。春は淡い緑色です。そのうちに、田植えの準備のために、一面が土色になります。そして、もうすぐ水ガラスが広がります。水ガラスは、夏に向けて、緑色を濃くしていきます。秋になると、だんだん色を変えて黄金色になります。

今年も、私は、「田んぼ」を眺めながら、季節を感じて過ごすことでし

よう。仕事のことで大変なことがあっても、不思議と「田んぼ」を見ていると心が安らぎます。農家のみなさんのご苦勞をこんな風を感じるのは申し訳ないですが、いつまでも「田んぼ」が眺められる海老名であってほしいと思うのです。

そして、もうすぐ、毎年のことですが、私は、あの男の子のことを思い出すのです。

次回は、「先が見えたら」と題して、教育の課題について、私の思いを述べてみたいと思います。